令和６年６月度
衛生委員会資料
産業医　上津　佳子

# 劇症型溶連菌感染症（STSS）について

人食いバクテリアとも呼ばれる「劇症型溶連菌感染症（STSS）」の患者数が、過去最多ペースで増加しています。感染すると多臓器不全や手足の壊死（えし）、敗血症性ショックなどを引き起こし、致死率は３割と言われています。特に中高年の感染が多くなっています。
溶連菌は、主に人との接触や飛沫（ひまつ）で感染します。症状が出ないことも多いのですが、まれにこの溶連菌が突然変異して血液や筋肉などの組織に侵入し、ＳＴＳＳを発症することがあります。発熱や悪寒、手足の腫れや痛みといった初期症状から急速に進行し、２４～４８時間以内に血圧低下や多臓器不全でショック状態に陥ることがあります。

国立感染症研究所によると、昨年のＳＴＳＳ患者数は941人で、現在の統計を取り始めた1999年以降で最多でした。今年は5月12日までに851人が確認され、昨年同期の約2.8倍に上ります。

ＳＴＳＳ患者は３０代以上に多いとされており、深づめや靴擦れなど手足の小さな傷や、水虫のただれから菌が侵入し、急速に増殖します。医療機関を受診しても早期の診断は困難で、症状の経過で判断するしかなく、足が腫れて急速に拡大し、３９度以上の高熱など

が出た場合は早急に対応が必要です。早い段階で抗生物質を投与すれば治療できますが、進行すると感染部位の切断が必要になります。強い症状があれば、一刻も早く救急車で入院設備のある病院を受診するようにしましょう。